

上顎全摘出・眼球摘出による顔面欠損を来した患者との関わり

Nursing of a patient with partial face deficit

by the total maxillectomy and enucleation of the eyeball

柴 美保、吉田 美恵子、丸山 貴美子

《要旨》

上顎全摘出・眼球摘出といった顔面欠損を来す患者は、大変な精神的苦痛を体験する。術前の説明・情報提供で、術後の対応方法としてのエピテーゼを視覚的に理解しイメージできる援助を行うことは、患者の術後の顔の変貌に対する心の準備、精神的ショックの軽減につなげることが出来る。また、看護師が同様の問題を持つ方々との交流の橋渡しをすることが、患者にとって療養生活・社会復帰において大きな力となる。

《キーワード》

顔面欠損、エピテーゼ、患者同士の交流

1. はじめに

上顎全摘出・眼球摘出を行う上顎癌では、術後、再発の早期発見のために、顔面の一部を欠損した患部をそのままにして数年間は経過を診るようになっている。しかし、社会の偏見・蔑視・就職差別などから、顔面欠損を抱えて生活する患者は、大変な精神的苦痛を体験する。

今回、顔面欠損を余儀なくされた患者と関わる機会を得た。看護の展開において、様々な情報を提供できたことで、患者より良い評価を得たので報告する。

2. 患者紹介・経過

A氏は男性、50歳代。ひとり暮らしで、入院中は家族の面会も遠方のため数回あったのみであった。化学療法と放射線治療の後、上顎全摘出・眼球摘出術を受け、プロテーゼと言われる特殊な義歯とエピテーゼの完成後、退院した。

’03.03.04. 左)上顎癌にて入院

’03.03.10. 左)上顎洞試験開窓・浅側頭動脈カニューレーション

’03.03.13.~’03.04.30. 動注化学療法・放射線照射

’03.06.04. 左)拡大上顎全摘出・眼球摘出・頸部郭清術

’03.08.27. 退院

3. 看護の実際

A氏は、眼球摘出を含めた手術を受けるか受けないか、かなりの期間悩んでいた。院内の喫煙仲間から、同じような手術を受けた患者が来院することを教えてもらい、話を聴いたりしていた。「話をしたときは頑張ろうと思った。けれど、もう決めなくちゃいけないのに、決めかねている。糖尿病が原因で失明してしまった人の話を聴くと、自分は片方見えるんだから、まだ良かったと思う。励ましてくれているんだと分かってはいるけれど、手術をしたこともない

人から、生きていればいいことあるよとか、片目が残ってるじゃないかと言われると無性に腹が立ったりする」と涙を浮かべながら話してくれた。

私は、視力については、諦めざるを得ないが、外見に関しては、術後、エピテーゼを使用することが少しでもA氏の救いになるのではないかと考え、説明をした。エピテーゼは身体の欠損箇所を補う装具で、審美および機能の回復を図り早期の社会復帰を促す。なかでも顎顔面補綴のエピテーゼの長所としては、**外科的処置が無い、外科技術では不可能な複雑な形態の作製が可能、顔面表情の再現が可能、修正・修理・着色が可能、患部周囲の清掃が容易、腫瘍再発の発見が容易、**とある。ホームページ¹⁾の資料は、リアルな写真が使用されているが、欠損部分をカバーできることを実感するためには、ありのままを示さなければ意味がないと考え、このままA氏に説明し渡した。手術後の自分の顔のイメージが少しでも出来、術後の生活に希望が持てるように援助を行い、不安の軽減に努めた。A氏は、資料を見て、半分は元気になったが、半分は落ち込んだと話していた。

手術1ヶ月後、A氏はひとり暮らしの生活のため、経済面や再就職について悩んでいたため、医療福祉相談室での相談を勧めた。

また、A氏はセルフヘルプグループ（NPO法人ユニークフェイス）会長の講演会開催を新聞記事で知った。ユニークフェイスは、顔にアザやキズなどのある当事者が、同じ境遇にある人をサポートするセルフヘルプグループである。講演会は信州大学構内で行われ、一般参加も可能であったため、A氏は直ぐに外出許可を得て、聴きに行った。この時、A氏の顔の左半分はガーゼで覆われていた。手術後、外出したのは、この時が初めてであった。会場が分からず、勇気を出して、近くにいた女子大生に聞くと、女子大生はA氏の顔を見て、少し驚いた様子であったが、会場の入り口まで親切に案内してくれて、とても嬉しかったと話してくれた。A氏の情報収集の意欲は、とても大きいもので、2列目に座り、後で聴き逃した部分を確認するため、テープレコーダーを準備していた。最後は、実際に就職差別はあるのかと確認の質問をしていた。

顔面の一部欠損のため、再就職の不安を持っているうえに、就職差別があると知ったA氏の心情を思い、A氏と同様の悩みを抱える人々の存在や活動について話し、そのなかで、顔面を含む全身熱傷の方の著書を紹介した。この本の著者は、『お前の顔は、一度会ったら忘れられない顔だ。だったら、それを“武器”にして生きていけ』²⁾という友人の励ましを支えに、現在は会社社長をしている方である。再就職について悩むA氏にとって、必ず良い刺激となると思われた。

後日、A氏は術前のエピテーゼの説明が手術後の自分の心の準備として役立った、術後に初めて顔を鏡で見たときのショックが小さくて済んだと手紙を書いてくれた。また、本の感想として、病院外に出る時の心構えが出来たとも言っている。しかし、A氏を見る外の世間の厳しいエピソードとして、外出時、数人の中学生にジロジロと顔を見られたという経験について話してくれた。また、エピテーゼの色合わせの時は、技工士だけでなく、毎日化粧をしている看護師にも協力してもらったなど、顔についての話を多くしてくれるようになった。そして、退院後の生活や社会復帰についての不安についても傾聴した。そして現在、A氏は「もし、顔の

ことで悲観されている方が居ましたら、私と会って下さい。誰かたった一人でもいい、支えとして助けてあげることができたら、と思います。」と話している。

4. 考察

顔の一部の切除を要する手術の説明の際、術後の対応方法としてのエピテーゼを視覚的に理解し、イメージできる援助を行うことで、術後の顔の変貌に対する心の準備が出来、精神的ショックの軽減につなげることが出来ると考えられた。

また、看護師が同様の問題を持つ方々との交流の橋渡しをすることが、療養生活・社会復帰において大きな力となることも分かった。顔の悩みについてはなかなか話にくいものだが、本の内容といった第三者のエピソードなどをきっかけに、会話が進むことがある。セルフヘルプグループの会合も多くは東京開催であり、遠方であることだけでも参加は困難である。今回の事例のように、患者の協力が得られる場合、外来受診の時を活用し、患者同士の情報交換の場を設定するのもひとつの方法と思われる。

患者のニーズに合わせた様々な情報を提供し、ひとりでも多くの患者が、社会復帰に向けて一歩踏み出せるように、今回の事例で学んだことを、今後の看護に活かしていきたい。

引用文献

- 1) ティースハット 人工ボディー研究所：<http://www1.sphere.ne.jp/teethhut/seihin/seihin2.html>
- 2) 古市佳央：這い上がり ある「顔」の喪失と再生の半生記、株式会社ワニブックス、2001.

図 1

